

北陸Regionダンスフェスティバル2024

事業報告書

この場でしか生まれない
“つながり”を築き
創造の力で発見や感動を生み出す

北陸Region ダンスフェスティバル 2024

「北陸Regionダンスフェスティバル」は
アーティスト・イン・レジデンス・プログラム(AIR)です。
これまで劇場型で開催して来た「北陸ダンスフェスティバル」が
新しいフェーズに入りました！

多様な表現のオリジナリティを持つアーティストが
北陸地方の“まち”に滞在し、地域の住民と関わりながら、
発見と感動、交流のきっかけを与えられるような
アート活動を支援します。

選出されたアーティストのみなさんには、市民と積極的に関わりながら、
その場所でしか生まれ得ない活動や作品創造を実現し、
アーティストとして社会に関わる活動を実現していただきます。



能美市

アトリエGIMOTO
〒923-1225
石川県能美市松が岡1-15

能美市立和気小学校にてワークショップ
訪問型「祝うパフォーマンス」実施

レジデンスアーティスト
赤丸急上昇 赤松美智代+丸山陽子

“笑いは力”そう信じる二人が醸し出す
赤丸ワールド。複雑怪奇な世の中だか
らこそシンプルに人の心に伝わるダン
スを求めて活動中。山育ちの赤松美智
代+海育ちの丸山陽子。対照的な二人
は性格も好きなものも正反対。そんな
二人がバトルしながら絶妙な感覚で生
み出す世界は、単純・明快だけれどなぜ
か心温まり、一度味わうとくせになる。
これまでに、America・Asia等、国内外30
都市以上で作品を上演してきた。

撮影：一葉

金石

金石町家(仮)
〒920-0337
石川県金沢市金石西1丁目27-13

小学生～90代まで
それぞれの年代ごとにお話を聞き、
1つの脚本を作ります。

レジデンスアーティスト
私道 かび

作家、演出家、アーティスト。京都を拠
点に活動する団体「安住の地」所属。身
体性を強く意識した演出と、各地に実
際に滞在し聞いた話を基に作品をつく
る。近年はお祭りや養蚕、流域や団地な
ど土地とつながりの深いテーマで制作
している。2023年度ACYアーティ
スト・フェロー。

撮影：山下裕英

主催：北陸つなげて広げるプロジェクト 芸術監督/企画制作：宝栄美希

助成：公益財団法人 滋谷工業芸術文化スポーツ振興財団、アーツカウンシル金沢(公益財団法人金沢芸術創造財団) 協賛：アトリエGIMOTO、加賀建設株式会社

協力：能美市立和気小学校、誓立寺、金石町家(仮)、北村周士(能美市議会議員)、萩田護(ヨシタデザインプランニング)

照明：宮向隆 音響サポート：上野賢治、山田のぶ 映像撮影：奥祐司 写真撮影：フォトグラファ―NOD 野田啓 制作：宝栄美希 運営：青木正子



目次

事業について

[概要]	-----	3
[詳細]	-----	3
[実施スケジュール]	-----	3
[事業の目的]	-----	3
[主催団体「北陸つなげて広げるプロジェクト」経歴]	-----	4
[新事業起案に至った理由・課題]	-----	4

活動報告

Aチーム	-----	5~7
Bチーム	-----	8~12
[総評] 黒澤 伸	-----	14
[総評] 乗越 たかお	-----	15
[事業をを終えて] 宝栄美希	-----	16
北陸Regionダンスフェスティバル2024 機構	-----	17



【事業について】

[概要]

北陸初の公募型アーティストinレジデンス及びフェスティバル。全国から実力あるアーティストを公募/ 選考を経て採択し、石川県の「各地域」に招聘する。

地方のオルタナティブスペースを活用した公演を行う事で多様な表現を地域住民が気軽に見られる場を作り、アーティストの開催するワークショップによってアートの地域への普及促進を行う。

特に、コロナ禍の収束により文化芸術活動や観光産業復興が盛んになる中で、これまで注目されていなかった田舎にスポットを当て、アーティストと地域住民が協働で地域の発展及びコミュニティの活性化に臨む場を作る。

それら活動の全てをWebサイトやSNSによって配信する事で、北陸や石川の今まで知られていなかった魅力を世界に発信したい。

[詳細]

- ・全国よりレジデントアーティストを募り、石川県の地域【能美市・金石】に招聘し、約一週間現地に滞在しながら地域のオルタナティブスペースを活用した滞在制作を行った。
- ・アーティストの選定及び採択は、それぞれの地域にゆかりのある人々の意見を交えて行われた。
- ・滞在先ごとに地域にゆかりのある人々にサポートを依頼し、また地元アーティストとの作品の共同制作を行う他、その地域の住民との関わりや集客、空間の活用について協働で模索した。
- ・アーティストは滞在中に現地でのアウトリーチやワークショップを開催し地域住民と関わる活動を行った。
- ・滞在中に成果発表として公演を行い、また終演後にはアーティストと人々の交流の場を設けた。
- ・アーティストがその地域において行った活動を通して得られた感想、意見意見を交換する「報告会」を行った。
- ・事業終了後、アウトリーチの様子や公演の映像を無料配信し、石川県及び北陸地方の新たな魅力として全国・世界に向けて発信している。

[事業実施スケジュール]

2023年12月 滞在所/サポートアーティスト決定、技術スタッフ確保

2024年1月20日～3月3日 滞在アーティスト募集

3月中旬 招聘アーティスト決定

4月中 スタッフ打合せ・アーティストとの打合せ

5月 公演チケット等販売開始

6月 プレスリリース等発信

7月 北陸Regionダンスフェスティバル2024実施

8-9月 映像編集・オンライン配信、事業報告書の作成

[事業の目的]

本活動の目的は、日本全国から多様な表現のオリジナリティを持つアーティストを県内各地に招き、コンテンポラリーダンスにより北陸と全国をつなぐと共に、アーティストが地域の人々と関わりながら地域コミュニティの活性化を行い、人々がダンスに触れることにより心身の健康促進を図り、公演によってこれまでその地域を訪れることのなかった来訪者・観客を呼び込み観光や地域振興の活性化に繋げることである。

そしてコンテンポラリーダンスを含むアートを取り巻く社会背景について、地域住民とアーティストが共に考える場を創りたい。

また、アーティストに自然の中や古民家など従来の劇場公演と違った創造的な表現の機会を提供し、オルタナティブスペースとして活用してもらう事で、創造的な場としての地方の可能性の開拓を行う。

コロナ禍が収束し、今後、文化芸術の発展や観光産業復興が速度を上げていく中で、石川県及び北陸地方のあまり知られていなかった田舎の土地を、アートと地域の人々の力で活性化し、それを発信する事で新たな可能性の風を巻き起こすことを目指す。

[主催団体「北陸つなげて広げるプロジェクト」経歴]

2015年北陸新幹線開通を機に発足、貴財団の助成によりIshikawa Dance Festivalを開催。

以降“アーティストと市民”が主体となり、「北陸地方唯一のコンテンポラリーダンスフェスティバル」として毎年ダンスフェスティバルを継続開催している。

これまで多数の新進気鋭の若手ダンサーや、北陸にゆかりがあり海外でも活躍するアーティストを石川県に招き、合計約80組のアーティストが金沢で作品上演を行った。

その他、コンテンポラリーダンスを知るためのレクチャーや市民参加型の作品の上演を企画し、市民がより舞台芸術を身近に親しむことが出来る機会を作ってきた。また、コロナ禍において、無観客ライブ配信の実施や、感染予防に努めつつ鑑賞の新様式に取り組みながら事業を継続し、石川県の舞台芸術の火を絶やさず、その発展へ貢献してきた自負がある。

本年度11月には貴財団の助成を受け、通算9回目となるダンスフェスティバル事業開催を予定しているが、コロナ禍が明け全国の舞台芸術活動が活性化したことや、百万石文化祭開催の後押しもあり、上演作品公募は過去最高の応募数となった。この勢いを保ちながら、北陸の舞台芸術の再興に向けて今後とも努力したい。

新型コロナウイルスの影響を受けたものの、継続開催とコロナ収束の流れにより着実に、コンテンポラリーダンスを含む舞台芸術と市民の距離は縮まってきている。一方で、継続故に多くの可能性とともに課題も見えてきた。今後ともアーティストと協働する市民とのつながりを深めながら、この可能性の実現・課題解決に取り組み、事業を通して全国のアーティストに呼びかけ、アートと地方創生の関わりについて共に考え、県内外の文化芸術の輪の広がりと繋がりを強化してゆきたい。

[新事業起案に至った理由・課題]

当団体は2015年の北陸新幹線開通より毎年ダンスフェスティバル事業を開催し、コンテンポラリーダンスにより北陸と全国をつなぐ窓をとって来た。また、継続することで劇場を訪れる観客の見る目は深まり、アーティストと市民との交流も盛んになり、石川県金沢市及び北陸地方の魅力発信にも効果があった。

しかしながら石川県内におけるコンテンポラリーダンスの認知度は金沢の中心地と舞台芸術やアートに関わる人々へのみ広がり、多くの人々にとってはまだまだ関わる事の無いもののままである。

ダンスフェスティバル事業の継続により着実に成果を残してきた事は確かだが、まだまだコンテンポラリーダンスの可能性を生かしきれていない面もある。

全国的にはコンテンポラリーダンスの需要は高まり、テレビ等のメディアでも見られることが多くなった。しかし、エンターテインメントに留まらないコンテンポラリーダンスの可能性を、これまで舞台芸術を含むアートに触れる機会がなかった人々に身近に感じてもらえる形を模索していく必要がある。コンテンポラリーダンスを人々に伝えることで、文化の多様性と豊かさの促進、創造性と表現力の育成、コミュニティの活性化、身体的な健康の促進、観光や地域振興の活性化など、多くの役割を果たすことができるからだ。

その為にもアーティストが地域住民と距離を縮め、お互いを尊重しながら直接関わり合える環境を作り、そこから生まれる新たな経験をシェアする環境を作ること、これが現在の課題に向き合う方法だと考えた。



【Aチーム：活動報告】

滞在場所：アトリエGIMOTO(能美市)

招聘アーティスト：赤丸急上昇

[赤丸急上昇プロフィール]

”笑いは力”そう信じる二人が醸し出す赤丸ワールド。複雑怪奇な世の中だからこそシンプルに人の心に伝わるダンスを求めて活動中。山育ちの赤松美智代+海育ちの丸山陽子、対照的な二人は性格も好きなものも正反対。そんな二人がバトルしながら絶妙な感覚で生み出す世界は、単純・明快だけどなぜか心温まり、一度味わうとくせになる。これまでに、America・Asia等、国内外30都市以上で作品を上演してきた。<https://akamaru-matsuyama.jimdofree.com>

[実施内容]

・ワークショップ開催

7/10(水)11:20~12:15 和気小学校(2年生33名)

13:30~14:25 和気小学校(3年生23名)

19:00~20:30 一般向け有料ワークショップ(参加者14名)

・お祝いダンス実施 (小学校・ちいちの華・しょうちゃん家)

7/11(木)13:00~ 和気小学校 (7月生まれの子供おおよび先生の誕生祝い)

14:00~ ちいちの華 (デイケア・長寿祈願)

17:50~市民宅 (発達障害のある中学生の誕生祝い)

・成果発表公演/作品「廻」上演

日時：7/13(土)19:00~、7/14(日)16:00~・18:00~本番2回

場所：誓立寺(能美市)

出演：赤丸急上昇 照明：宮向 隆 音響：上野 賢治



[感じたこと]

まず最初に、日常の中にアート、ダンスがある。それが私がいつも望んでいることです。出発の朝、鏡に向かって化粧取りあえずしつつ、冒険へいくんだな。と心と向き合ってる私。この旅から松山に戻る時、私は何を考えているんだろう?社会の中で何をつくるか、ダンスで何ができるか?何をしたいか?それを考えつつ、旅してみよう。まずは自分自身と向き合ってみないとね。と、自分の事ばかり考えた作品なんて私は見たくないよ。と何か矛盾のような予感に出会う。頭だけで考えたことは、後からなんかチグハグとなる。新しいものを発見したいし、くんくんとおいたい、でも古くからあるものや、いいなって思うものを大切にもしたい。生き生きといきる動きは、何もかもダンスにみえる。つかさねた美しさにも、またダンスを感じる。生まれたての赤ちゃんがハイハイしている姿、おにごっこなんかしている小学生。中学生や、高校生の顔の表情や、友達とのキョリをつめて座っている感じや、ムダな動きをいっぱいつけてしゃべってる大人(ぜんぜんムダじゃないけど)(むしろそれがめっちゃいい)ちょっと疲れてかたくなっている背中に呼吸が通る瞬間、シワと黒ずみがすごいけど、めちゃくちゃ味わいのあるあの足、歴史のしみ込んでいる手の甲。それぞれの動きのクセがしみついて歩くだけであなたとわかるその感じ。そういうものにダンスを感じる。力を抜いて、身体のことには耳をかたむけ、身体が教えてくれる通りに動く、そうするとなんか自由を感じる。お寺もいい感じ。ビューたん面白い音。ふすまを開けてしめて、空間が変わる、いろんな面をもつ寺、面白い。こっちで、こうむきで、とりあえず身体を使ってかたっぱしから試す。わかる。やっぱりそこに行くの大事。みやむ一の明かり最高。ウサギが現れた。温泉。あったかい。お湯、至ってシンプル、シンプルなんだけど、シンプルが透き通っていてめちゃ純粹。露天風呂で、ごろりとリラックス。見上げると木々がしゃべっている。風がふくたびに、ざわわわわわわーんとおしゃべりしあって、その瞬間にキラキラ、キラキラと濃い緑や薄い緑がざわめきたって、本当に美しい。しばらく見とれてる間に身体がめちゃくちゃあったまっていって、温泉の中で、いろんな人と出会う、色っぽいママや可愛い姉妹、ゆっくり石をつたって湯に入っていく様子は、なんとも可愛らしい。ご年配のご婦人が転げそうになる子供を心配してる、なんかみんな家族みたい。素敵なコミュニティ、温泉っていいな。じーん。帰りに居酒屋。生ビールで乾杯。サイコウ!天ぷら、刺身、せっかく石川にきたんだ。やっぱ魚でしょ。と思いつつ、丸干しイカ(珍味)お近づきのしるしにって店主からのプレゼント。これも濃い味でたまらん。お酒に合いそう(私は弱いから飲まないけど)丸は手取川、川の名前のお酒。一口もらう。旨し。最後に店主のうった蕎麦を食べて、もうサイコウ。そこで、米農家の「ぴい」に出会う。何しにきたん?となり、北陸Regionダンスフェスティバルのこと伝える、見にきてね♡とチラシを配りまくったら、あっといって残りがなくなってしまった。ミッキーが言っていたように、アートなら俺は関係ない。といった感じだったけど、店の中にいたほぼ全員が、私たちと飲んでいたら、「おー、わし親に行ってみようかな?」と70歳?80歳?くらいのおじさんが嬉しそうに言ってくれる。みんなが興味を持ち始める。居酒屋の店主が、「赤丸がココにきて、みんながこう

やって盛り上がり、楽しんで。あんたらがいたら、なんか楽しい。みんな喜んで、これをしにきたのね」と言われる。踊りに来たけど、確かに、踊る前に人と人。人と交流する中に様々な楽しみがある発見。交流。楽しいー。良い酒。今日の一番は、つきだしの「あずきがい」ごちそうさまでした。山、湧き水がすごくきれい。山菜をつんで食べる話や、そこで茶会をしていた話。なんか、自然の中でも水が本当においしくてやわらかい。みどりもすごい。龍を感じる。安宅の関で巫女さんから弁慶と義経の話聞く。実際、この場所で、起こったことと、思いをはせると、胸のおくがグッとくる。話は戻るけど、お寺での明かり、本当に素敵だ。明かりから教えられることがある。この寺で見つかることがある。公演後に、座談会もして、みて頂いた方と色々なお話。ある方が、「人がいたら、できるだけ、人と違わないようにしようと生きてきた。。。けど、自由にいろいろやって、自由にいろいろ感じて、それを自由にしゃべっていいだなんて、とっても素敵ですね。」と言われたのが印象的。人間はホモルーデンス(遊ぶ人)遊びの世界や遊びの空間に生きること他者と交わり遊びむ♡みんな豊で幸せになれると思う。

[終えて]

旅からもどった。新しい土地でかけがえのない人やものに出会えた。ダンスを通して、いろんな交流。宝栄ミッキーのバイタリティすごい。北陸Regionダンスフェスティバル。アドバイザーの乗越さんの言葉が脳裏に残ってぐるぐるとめぐり続ける。市場ではなくて、創る、出会う場。世界的にみても最先端。確かに、出会った。生み出す場だった。その場にいて聞けてよかったいろんな話し。金沢アーツカウンシル黒澤さんの言葉が、次へ向かう勇気をくれた。そこに集うみんなのミッキーへ、人へ、地域へ、場所へ。様々に愛がある。初めて訪れる場所での、筋書きが決まっていない活動は、「生きている」と感じた時間(ダンス)となりました。(赤松)

直感で「行きたい!」と感じて応募したこのA.I.Rは、直接石川に行く前のオンライン審査から既に私たちに発見をくれるものだった。石川県のことを全く知らない私たちだったけど、話していると私たちの活動拠点の松山市に似ている部分も多く感じる。そんな中、赤丸急上昇がやりたいのは、アートと聞くと、「じゃあ観ない、じゃあ行かない」となるような人へ届くアート、それを深めているのです。それを創りに行きたいのです。それは一体何なんだろう？

から始まったこのA.I.R。石川の地で石川のものを口にし、空気にふれ、人に触れていけばいくほどやろうとしていた内容が変わっていく。それが大変だけれどもなんだか楽しかった。舞台本番も、3回公演の中でどんどん自分が変わっていくのがわかる。その回ごとの表現方法が自分で楽しめたのが何より大きかった。よく、舞台では「こうであらな」と構えてしまいがちだが、その場で感覚が研ぎ澄まされ変わっていくことをよしとされているこのA.I.Rのあり方がありがたかったです。(丸山)

[今後の展望]

また石川県には絶対に行きたい

石川で踊りたい

石川で生まれた、石川の人が踊る作品を松山に呼びたい

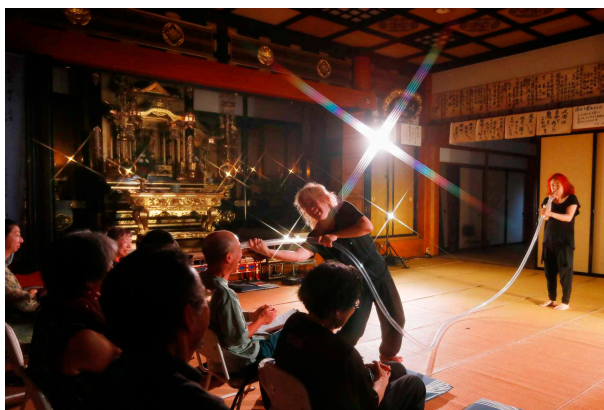


[どの様なつながりができたか]

小学校ワークショップで子供達に出会えました。この子供達からお手紙をいただきました。いつかまたぎっと会いたい、そんなことも書かれていました。何年、いや何十年か先に、この子どもたちが自分を表現することを望み、この地でアート活動に目覚めてくれるかもしれないと感じました。そして、宝栄ミッキーに出会えて繋がりができたことは大きいです。宝栄ミッキーがいたからこそ、アトリエGIMOTOのまーちゃんとも絆が深まり、そのまーちゃんの人脈の広さからも、いろんな方と知り合え、さらにこの企画に関わることで、出会えた乗越さんの言葉にはいくつもハッとさせられて刺激を頂き、さらにアーツカウンシルの黒澤さんとも繋がれました。黒澤さんの言葉に私たちのこれから進むための勇気ももらえました。全部、全部、素晴らしいつながり。本当にありがとう。

[それは今後の発展につながったか]

間違いなく、今後につながっています。生き続け変容していく日々がそのまま、全てダンス。その場所でしか生まれない特別な作品が旅を通じて生まれた。旅するダンス。本当にありがとうございました。



[能美市サポーター（宝栄美希）感想]

石川県能美市は自身が2016年にUターンしてから拠点置き、コンテンポラリーダンスを普及させようと奮闘してきた土地です。赤丸急上昇を能美市に招き、地域の人々と関わりながら活動してもらい、彼女たちの発する言葉を通して、今まで知らなかった能美市の新しい魅力を沢山知ることができました。生まれ故郷の良いところも悪いところも、外からやってきた人の感覚で見ると全く違ってしています。そして、生まれ育った地域にもかわらず、普段は忘れてしまっている地域の特性や豊かさ、当たり前になっている人々の優しさなどに気付かせてもらいました。田舎だから新しいやり方に変えていかねばならない、と考えがちですが、田舎ならではの良いところを尊重しながら、アーティストが地域の人々と共生して行くための1つの形を彼女たちを通して見ることができました。また、現地の住民の人々は、違う土地からやって来た人の違った感性に触発されて、彼女たちと関わった人々の大半が何らかの影響を受け、また彼女たちに出会えたことを喜んでいました。和気小学校と一般向けのワークショップでは、彼女たちの個性が生徒達や受講者を虜にしていました。お祝いダンスでは、子どもからご老人までの様々な年代の人々に喜びを与えていました。特に印象的だったのは、お寺での公演を観にきた80代の女性が「コンテンポラリーダンスというものを初めて見て、これまでは周りとは違う様に見えることに一生懸命だったけれど、自分の自由な感じ方で表現していいのだということを知った」と仰ったことでした。能美市にその様な考え方をしてくれる方がいたことに感動し、またこの場に足を運び、彼女たちと出会ってくれたことをとても嬉しく思いました。AIRにおいて、アーティストと直接関わることができる人数は限られていますが、彼女たちが見つけて表現してくれた能美市の魅力を原住民の人々に伝えることで地域力を高め、全国世界に向けて発信することで観光産業や移住の促進につなげます。



【Bチーム：活動報告】

滞在場所：金石町家(仮)(金沢市金石)

招聘アーティスト：私道かび

[私道かびプロフィール]

作家、演出家、アーティスト。京都を拠点に活動する団体「安住の地」所属。身体性を強く意識した演出と、各地に実際に滞在し聞いた話を基に作品をつくる。近年はお祭りや養蚕、流域や団地など土地とつながりの深いテーマで制作している。2023年度 ACYアーティスト・フェロー。 <https://anju-nochi.com>

[実施内容]

・金石の人々にインタビューし、脚本を制作。

・ワークショップ開催

7/12(金)19:00~20:30 一般向け有料ワークショップ(参加者15名)

・成果発表公演/作品「かないわのこえ」上演

日時：7/15(月/祝)14:00~ 場所：金石町家(仮)

脚本：私道かび

出演：おのぞりほ(劇団アンゲルス)、木林 純太郎(劇団アンゲルス)

振付：宝栄美希 照明：宮向 隆 音響：山田のぶ



[かないわ滞在日記]

0630

金沢着、ホテルに荷物置き歴史博物館に行く。チケット売り場で勧められた武将の展示を見ていたら、全然最後の祭りコーナーを見られなかった。残念。参勤交代コーナーと戦前戦後周辺の展示がおもしろかった。武士と一揆の場所である石川は、やはり県民性として意志が強いのかもなと、道中に出くわした勢いのある街宣車を思い出す。「良識ある金沢市民のみなさん!」「あんなやつらに!」といさましい声が休日の21美周辺に響いているのはなかなか異様だった。博物館を出ると雨上がっておりオヨヨ書林目指すも閉店していた。仕方なく近くの観光案内所で地図貰おうと探していると、ガイドの方に話しかけられる。金石街道のはなし、歴史上の人物の話の話を聞いた。前回金沢での公演の際に見た尾山神社がはからずも金石街道の突き当たりにあったので驚く。本屋に寄り泉鏡花がよかったので買い、地下で食料品買い、ホテルで食べる。明日からはとうとう梅雨前線真っ只中なようだ。歩き回るより本で調べ物をするくらいがいいのかもしれない。

0701

疲れているのでゆっくり寝ようと思いつつも7:30に目が覚める。13:00-滞在場所兼会場である金石町家(仮)打ち合わせがあるので、昨日観光案内所で聞いた金石街道/県道17号を歩いて向かうことに。広さで言うとメインストリートだったのだろうという雰囲気があるが、いまは完全に車用の道。古い店もあまりなく、整体が多いなと思った。曇りだが結構気温が高く、半分ほど歩いたところのスーパーで涼む。スポドリを買っていると、氷室饅頭なるものが大量に詰まれているのに気づいた。昨日今日がこの饅頭を食べる日らしい。またしばらく歩くと道中の和菓子屋にひっきりなしに車が出入りしている。試しに入ってみると、「ご予約:〇〇様30個」などすごい数の饅頭が予約されていて度肝を抜かれた。後ろのおじさんも15個くらいカゴに入れていて驚愕する。私は水饅頭と氷室饅頭を2つ買った。金沢の和菓子への本気を知る。途中、道の真ん中に松が植えてあるゾーンがあり、昔の名残かなと思った。この道から県庁や市場に伸びている感じもして、確かに昔はこの道が1番栄えていたんだなと思った。寄り道しながらなので結局2時間くらいかかってしまった。海みらい図書館に行きたかったのですが、本来は地元のご飯屋さんに入りたかったが急遽手前の丸亀製麺でさっと昼食を済ませることに。並んでいる人が多いなあと思ったら今日は1日、釜揚げ半額日だった。前に並んでいたおじさんが「ここ初めて来たんだけど、すごく並んでるね。何のメニューがおいしいの?」と言うので、釜揚げが半額なのでみんなそれ食べに来てるんだと思いますよ、と言うとそれにするという。このあたりの人かと聞くとそうではなく、免許更新に来たのだそう。後から会計を済ませると、混雑していたので席を取ってくれたらしく遠くで手招きをしていた。そのまま滞在のことを話すと「行きたいけどあの辺りは駐車場がないからなあ」と言う。警女の冊子渡して日程などを伝えて別れた。駅から歩いてきたと言うと「帽子は?日傘は?熱中症気をつけてよ」と何度か心配してくれた。その後図書館に行き、北前船の関連本の多さに驚きつつ30分ほど読んだ。至る所に「撮影禁止」の張り紙があり、閲覧席も予約式など結構決まりが多くあまり居心地はよくなかった。金石町家(仮)で宮向さん、のぶさん、門阪さん挨拶。会場を案内してもらおう。外と中の流れをどう使うかが肝だなと思った。客席は案内入りそうな所感。宮向さんとのぶさんに金沢の和菓子事情を聞いた。正月や婚約の際にも決まったお菓子があるそう。1時間半ほどして別れ、そのまま日和山へ。神社にお参りして海岸に出た。ゴミが多く昔海水浴場だった感じがしないが、落ちていた貝殻が今まで見たことないくらい綺麗な形を保っていて何枚か拾った。図書館に向かう道すがら、暑すぎてローソんでカフェラテを買う。店員さんが気さくで、常連さんばいお客さんと話していた。「昨日夜の雨すごかったらいいね!〇〇さんなんて眠れなかったって言ってて、でも私全然気づかなかったのよね、鈍感なのかしら」。お客さんも、店員同士も雰囲気いいコンビニだなと思った。図書館に行き金石町市や金沢市史、写真集などを片っ端から読む。閉館後、バス停を見ると駅行

きのものがなかった。どうやら県庁横の道からは出ているようで、とりあえず県庁まで歩く。お腹が空きすぎて氷室饅頭食べる。皮がもちもちで確かにおいしい。県庁まで出ると駅までまっすぐ続く道が延びていて、いまは17号よりこちらが栄えているのだと一目瞭然

だった。NHKも新聞社も会社の支社もぜんぶこっちの道沿いにある。結局「いけるんじゃね」と思い周辺を見ながら金沢駅まで歩いた。「肉！」と思いフォールスで牛タン定食食べホテルに帰る。ひたすら歩いた一日だった。

0702

疲れがすごいがリサーチが足りない時の恐怖が強く、バスで金石に向かう。昨日2時間近く歩いた道が20分で着いたので驚愕した。大野湊神社、幼稚園側から入ると何本もの橋があった。木がうっそうとしていて、荘厳な空気が漂っている。そこにパンパンと大きな音が響いたので見ると、大きく手を打っている参拝者がいた。境内隣の木の中身が見えていて、大きくうねっておりすごかった。滞在の挨拶を兼ねて手を合わせる。公園へ出ると亀がたくさんいる池があって、飼い主と犬が並んでベンチに座っていた。犬がずっとこっちを見てくる。池を一周してよく見ると、亀どころかスッポンばい生き物や大きな鯉、鴨などたくさんいた。みんな元気。銭屋五兵衛博物館へ。人がいない中、何分かに一回船の模型の帆がぎしぎし自動で動くので最初は心臓が飛び出そうなほどびっくりした。宮越の歴史もよくわかって勉強になった。映像を見せてもらったが、随分人格者に描かれておりやはりこの土地のヒーローなのだなと思った。銭五銭五といたるところにその名前が残っていて、子どもの頃から教育を受けるのかなと想像する。図書館の本に「金石は今では港の活気はなく、銭五で何とか持っている」と辛らつな記述があったことを思い出した。館の方で参考文献に金石の浄瑠璃本を買う。金石は歌舞伎が盛んだったという記述に、港が栄えていた頃の活気を思った。そらみそへ。レジデンスのチラシが大きく貼ってありびっくりした。金石港を見ているとサギが浅瀬で小魚を取って食べている。この辺りは何が捕れるのだろうか。金石荘は人が出入りしていて活気があった。せっかくなので金石小学校を見に行くついでに大野まで歩く。途中中屋で消しゴムと折り紙を買う。たればんだやこげばんだ時代がそのまま止まったような品々が懐かしい。小学校は道路側に仕切りがほぼなく広々としていて雰囲気良かった。このあたりに昔芝居小屋やリゾート施設があったのもわかる気がする。大野までは思っていたより遠く(というか暑く)、大野港を見たあたりでへろへろだった。しかし駅まで出るバスがなく、県庁まで歩くことに。県庁に着く前にさすがにぶっ倒れそうになり、マクドナルドに入って40分ほど涼んだ。鏡で見ると顔が真っ赤で、あのまま歩いていたら結構やばかったかもしれない。駅に着き荷物を受け取って東京への新幹線に乗り込んだ。集めた情報を元に何を聞きたいかまとめようと思う。

0708

10時半金沢駅発の金石行のバスへ乗る。湿気はあるが、東京に比べたら暑さもういぶんましのような気がして、気温を見ると5度ほど違った。到着してしばらく門坂さんと話す。かなラボについてと、お祭りについて聞く。年代別に歩く行列は、この地域の生きている人々の縮図を見ているようだと言っていたのが印象的だった。確かに生きた絵巻物感があるのだらうと想像する。高校生たちの悪魔祓い見てみたいなあと思った。「金石の交わり」が金石の語源だそう。12時半から妙覚寺でお話を聞く。事前にかないわレシピの記事を読んでいたが、実際お会いすると思っていたよりもずっと物腰のやわらかい方だった。「シケで魚がなかったもんで」という言葉に、ああ漁師町なのだなあという気持ちになる。今日は実際にかないわレシピの料理を食べながらお話ししましょうということで、小鰯と薬味を混ぜたものに(大きいよりも小さな鰯が美味いとおっしゃっていた意味が一撃でわかるおいしさ)、生臭漬けとご飯をいただく。小鰯、骨の処理などにとても手間がかかったと察せられて、よりありがたかった。生臭漬けはとても好きな味で、きゅうりよりもナスの方がより魚独特の味わいがあるとお米が進んだ。昔はお年寄りが多かったが最近人は少なくなっている話や、金沢港ができる際の金石港の様子を聞いた。「三八豪雪」というのがきっかけでいろいろと整備計画が進んだそう(調べよう)。銭五の金石以外での記述の話が興味深い。その中で「いまでも銭五の末裔がおるからね」という言葉に、この町の人間関係と歴史が直結していることを実感する。かないわレシピはもともと漁師の法事なんかで「あれはうまかった」と自然に料理の話になることが多く、そこから生まれた側面もあるようだ。隣町でレシピを聞いた際に、「その魚をそうやって食べるのは…」と聞いてみたら、案の定その人の妻が金石出身だったというエピソードがおもしろかった。ほかにも石好きのお父様の話や、昔は金石にたくさんあった医者のお話、湧き水や地蔵の話など話題が尽きなかった。何時間でもお聞きしたい、と思いつつも醤油煮のお魚をごちそうになってお礼を伝え別れた。醤油煮の魚は、醤油で表面がコーティングされたようになっていて、内側の身は淡泊でやわらかくこれまでにないおいしさ。煮て泡が立った醤油でぱっと短時間で煮るのがコツなんだそう。そして、やはり大野や金石の醤油というのがポイントだという。その地域で食べるものはやはり地のものを使う理由があるなあと思った。移動して、加賀建設の手がけた建物たちを見てから社長にご挨拶をする。これまでの流れをお話してもらい、なぜ金石町(仮)ができたのか、続けていこうと思っているのかがよくわかった。「この町家がなくなったら、ここ金石の風景は随分変わってしまうだろうと思って」という考えでここをリノベーションされたという話と、コロナ禍で自らが神輿を担げなかった経験から、祭において初老神輿の重要さについて考えてらっしゃる話が印象に残った。しかし、三代代が同じ通学路を通過して小学校に行っているというのもすごいことだなあ…。その後は町家へ帰り、スーパーで食材を買い米を炊いて夕食。資料整理したり、話した内容を調べていたりしたら21時になっていた。金石荘へ行く。情報量が多くてどちらに歩くのかかわからず混乱した。受付で「券売機」と指されてやっとその存在を知る。年配の方が多く、楽しそうに背中を流しあう人や、無言でささっと出る人などさまざま。新たにお湯場に行く際には、その場所の暗黙のルールを読むのに苦労するのだけど、たぶん今回は完全に読み間違えた。おそらくかなり浮いていたと思う。お湯は暖かくとろとろしていて「温泉だー」という感じ。湯船の壁に金石の祭りの様子が描かれていてぱっと眺めた。子どもたちが悪魔祓いをしているらしい様子があって、今日門坂さんから聞いた祭りの様子を思い出す。脱衣所で、ちょうど私のロッカーの上に入っていた人達とその前で楽しそうに話していて、遮るのもあれだし待っていようと思ってぱっと立っていると「あなたどこ(のロッカー)!?!」「ここ?」「あら一言ええよかったのに!」「大きい人が二人もいたら言えなかったよねえ」などと言って笑っている。出るときに「おやすみなさい」と声をかけてくれて嬉しかった。着替えているとき、その二人が「昨日あっち行ったけど、やっぱりあちはあつうで慣れんね。こっちが慣れるとからいいわ。どこ座るかも決まっとるし」「うんうん」と話していた。もしかしたらこちらに避難してきている人たちだったのかもしれない。ビオレのボディソープ一本のみを持ち込んで全身を洗っている人もいて、それぞれの作法とその裏にある事情を想像する。夜中、突然大粒の雨が嵐のように降り注いだ。その音がどかくて驚いた。

0709

6時半に起きる。眠たいが二度寝できず、仕事のメール何本か返して昨日の日記を途中まで書いた。今日は予定が盛りだくさん。10時半、大野湊神社で宮司さんにお話を聞く。気さくに質問に答えてもらいとてもありがたかった。「自分は大野ではなく大徳なもので…」とおっしゃったが、むしろ外から見た金石の声を聞けてとても参考になる。金石はやはり「町」だったという話し方に、栄える港を外から見る視線を想像した。元旦の地震の際には結構な参拝客がいる状況だったらしく、近くに避難されたとか。能舞台はいまだに奥が傾いていてこれから修理をされるのだそう。町に働きに出る人が多くなって、祭りの日に休日をあてるようになったと話して

いた。自営業が徐々になくなり勤め人が増えた影響がこんな形で出るのだと思う。境内のイカリや、櫓の木について色々お話を伺えて大変参考になった。ぜひ一本エピソードを書きたいと思う。その後旧拝殿で見せてもらった大絵馬が素晴らしすぎてぶっ飛んだ。保存状態がよいのはもちろん、描写の細かさや場面転換のスムーズさに度肝を抜かれた。（さすが藩のお抱え絵師…！）狛犬もとてもなく彫や表情が素晴らしく、「これ絶対グッズ化した方がいいよ！」と思った。フィギュアにしたら人気が出ると思う。愉快的表情でかわいらしく、ずっと見ていたくなる愛嬌があった。こんなお宝がある神社とんでもないな、と思う。雨が降ってきたので小走りで戻る。おひるごはんは天ぷらうどんをいただき（おいしかった…！）専長寺へ。住職は移転前の位置から今の位置へ変わる際に小学校に通われていたそうで、思い出話がおもしろかった。地震を受けての文化財の修復も寺によって異なっていて興味深い。境内に昔の歌舞伎役者の歌碑があり（なぜここにあるのかは不明）、土台のところにでっかく「劇」と彫られていて笑ってしまった。丁寧にひとつ一つ説明していただきとてもためになった。松の手入れをあえて祭りの時期に頼んでいた話が、寺社仏閣が多いこの地域ならではの気がしておもしろく感じた。銭屋五兵衛記念館で館長と学芸員のお二人に話を聞く。北前船と木材の話がとても勉強になった。能登方面には高い山がなかったため木材を運ばねばならず、しかもよい木材があまりなかったため目を見せないような装飾として「輪島塗」があるという説が印象に残る。江戸時代の人には七割は識字率あったのだという話や、空襲を受けるほどの産業が発達しなかったことが、逆にその後の発展を妨げているのではないかと（百万石といわれた米も結局はお金に換算しなければならないので）という話、県庁の移転によって金沢の様相がすっかり変わった話など、それまでの話を一本でつなげるような切り口をたくさん聞くことができ大変勉強になった。お二人とも金石の方ではなかったが、むしろ金沢全体から金石を見るような視点でお話してきてありがたかった。話し過ぎたので走って本龍寺へ。中学校から金石に来られたそうで、一歩引いた視点から地域を見ているのが、住職という立場も相まってとてもおもしろいと思う。積極的にお寺の中を見てもらおうという方向にシフトしている最中なのだそうです、それが「やっぱり地元の方に見てほしいから」という理由なのがいいなあと思った。うっすらと感じていて今日確信に変わったのだけれど、金石の人は京都の人の気質に似ている。最初は「外の人だ」という対応なのだが、何かの基準をクリアするととても親しくしてくれる感覚がある。京都で営業をやっていた時の感じをじわじわ思い出した。町家に移動して、「あたってみるといいよ」という方を様々紹介していた。その後は夕飯を食べてエピソードの案出し、金石荘に駆け込み（今日は若い人が多かった）、帰って深夜まで日記をまとめた。

0710

朝食を食べたあたりからものすごく雨。昨日までの話をおさらいしつつ、エピソードを何本か案出しする。金石電鉄の資料を調べる。今バスが走っているまさにその道を走っていたと知り、車窓の風景を想像した。小雨になったらまた振り出し、小雨になったと思ったらさらにまた強くなり繰り返して、10時半頃にえいやと昨日あいさつした商店へ。奥からちらっと男性がこちらを見ていたが気づくと引っ込んでしまい、すみませんと声をかけると昨日お話しした女性が出てきた。昨日渡したチラシを手にとって出てきて「やっぱりお断りしようと思って」と言う。全然そんなたいしたことじゃないですよ、と話すも「なんもしゃべれることないから、ごめんね」と繰り返す。あーこっちだったかと思った。時間がたつと色々考えてしまい自分の中で大事になったのだろう。「このお店は長いんですか？」と聞いても「うん」としか返事がない。「うん十年ですかね」と聞いても返事がなく、「何も話すことないから、ごめんね」としか言わなくなってしまった。せめて目の前の人間とコミュニケーションを取ってほしかったな…と思っていると、「せっかく来てくれたのに悪いね、はい」とペットボトルのお茶を差し出された。お茶を出して帰ってくださいって言われるってますます京都っぽいな！迷惑になっているなと思いお礼を言って店を後にする。雨は相変わらず降っていたが、せっかく出てきたので公民館で資料を見せてもらい、お話伺おうかなと思って向かう。一階で「公民館は三階ですよ」と教えてもらい、エレベーターで三階まで上がった。すると、男性が怒っている声が耳に届く。とても話しかけられる雰囲気ではなかった。ただでさえこんな天気だからね…みんな機嫌悪いわなと思って、今日はやめておくことにした。町家に帰っている途中、検索すると県立図書館へ行くためのバスがもうじき来るということ走って乗り込む。先ほど調べていた車窓を見ながら金石街道に行く。うしろのご婦人二人が「ここにあったパン屋つぶれたね」「高いけどおいしいって〇〇さんが言ってたの」「でもやっぱり超熱がおいしいよね」「うんうん。チーズ塗ってもマーガリン塗っても何でも合うしね」と超庶民的な話をしている、かつての電車の中でもこういう話してたのかなあと思った。片方のご婦人は子どもと孫あわせて9人いるらしい。「表彰してほしいわ」と言っていた。車窓を見ながら、正直まだ金石の課題が見えないなあと考えた。滞在の際には大概その土地の問題点を意識して作品の方向性を決めるので（例えば、警女の時であれば本人たちとかかわっていた周りの人たちの言葉が残っていないとか）、課題が見つからないと書く内容も定まらない。正直なところ、金石はいま特に何も困っていないように見える。演劇を見たいとも思っていない感じがする。別にそれが悪いわけではなくて、事実そうなのではないか、ということだ。その上でこういう人間が何をしたらちょっとは役に立つだろうか。ふと、以前聞いた「金石の町史はおもしろくない」という言葉を思い出した。これは同感で、事実が羅列された分厚い本、という感想だった。大野や他地域の方がよっぽどおもしろいらしい。すると、わたしが今回何か手伝いができるとしたらここではないか。もっとその当時の人間の動きや感情がわかる形で金石の歴史の断片を残したい。いつか若い世代が「この土地ってどんな人がいたのかな」と思ったときに、愛着を持てるような人間性を書き残せるといいのではないか。到着した県立図書館はきれいすぎて驚いた。民俗学ゾーンが大変充実していてここに入り浸りたいと思った。北前船の本を4冊ほど読んだ後、調べものコーナーで金石小学校について聞く。参考資料はないという。「町史に載ってるかと思うのですが…」と言われたので「町史見たんですけど結構硬かったんですね…」と言うと黙ってしまった。余計な事言ったかなと思いお礼を言ってひとまず町史をもう一度読む。すると数分後に「あの、金石小学校の探していましたよね」と同じスタッフさんが本を持ってきてくれた。

「石川郡史にも少し記述ありました」と渡してくれ、ありがたかった。小学校については望んでいたような記述はなかったものの、金石についていくつか初見の情報があって助かった。その後金沢の写真集や鉄道写真集、記録集などを片っ端から読み、メモを取ることを繰り返す。気づくと6時になっていて、ちょうど金沢駅行きのバスが来ていたので飛び乗った。駅のカフェでテキストに情報を落とし始める。明日しっかり執筆しなければとうとう間に合わない…。テキストは5本くらいになりそう。これをどう上演するのかを考え始めるととても書き始められないので、演出のことはいったんおいてテキストを考える。金石荘に着くと22時になっていて、受付はあずきバーを買うご婦人たちの明るい声が響いていたが、中はとても静かだった。一人でぼーっと考えていると、やはりWSで使うテキストと上演で使うものは異なった本になりそうだなと思った。おそらく明日書いたものは金曜日のWSで使用し、土曜日にそれをもとに脚本に仕立て直し、日曜日に役者さんに渡して稽古することになりそう。日記を書いて、少しテキストすずめる。

0711

昨日までに聞いた内容でひたすら書く。もう少し精査した方が本当はいいのだけど、と思いながらも様々なエピソードをまとめているので、1本あたりが長くなりがちだ。しかし分けて新たに1本にするほどの余裕がなく、泣く泣く削る箇所も出てきた。それにしても

やはり事実関係の確認に一番時間がかかる。図書館で本を借りられたらいいものの、カードを作れないので情報は逐一検索して答え合わせするしかない。意外と涛々園に関しては記事にしている人もいて、興味がある人がある程度いるのだなと思った。午前中にお話を聞く予定だった方がいらっしやらなかった。結局この町家の話は聞けないまま本番に入るのかなあと思う。昼間、門坂さんが能登の支援活動している方を紹介してくださった。「能登のお母さんたちとつくる郷土料理会」を明日金石町家（仮）で開催するということで、主催の方が打ち合わせに来ていたのだった。こういった活動をされている方は元々支援などに熱心なのだろうと思っていたら、意外なことに積極的にかわり始めたのはこの震災が初めてなのだという。発災直後、行政では時間がかかって素早く対応できないとのことで、民間で避難者と受け入れ先をマッチングするシステムを作った方がおり、そこへ部屋を提供したのが始まりだったという。2月の間に2組ほど受け入れたと言い、「その後もその方々と連絡は取っているんですか？」と聞くと「とっていない」そうだ「あまり甘えてくれないというか、一定の距離はある感じの付き合いでした」「でも考えてみれば、数日前までは自立して生きていたところに、急に震災で何もかも人に頼らなくちゃいけない状況になって、葛藤もあるんじゃないかと思って」「能登の人は特に、自営業とか自分で生計を立てている人が多かったからその傾向が強かったのかも」。その後、『能登のすてき写真展』を開催した話を伺う。地域別にフォルダを作り、そこに有志の人たちに写真を入れてもらい、印刷して会場に貼り出す。そのすべての写真が持ち帰りokという素敵な企画だった。好評のため今度は東京でも開催予定だという。展示する写真を選ぶ際に現地の人と知り合ったのだという。実際、会場では「これはうちの地区の祭りだ」などと会話が広がり、そのまま現状の悩みや思い出話に広がることもあり、会場のスタッフがその話し相手になる。そのため二回目の開催からはスタッフを増やしたそう。一人で来られる方や、家族で来られる方、避難先でぱったり会って来た人などがいる。「金沢にいと、能登は必ずつながってくる」と言う。子は金沢に出たが親世代は能登にいる、友人が嫁いで能登にいるなど、本当につながりは濃いようだった。「輪島出身の友人がいて、世間では最初のうちは『能登に来るな』と言われていたけど、その友人から『もう3日も食べてない』と言われると、何もできない状況が苦しくて」と目に涙をためて話していた姿が胸に迫った。「写真展を通して、能登は色彩が豊かなんだと気づいた」という。青の海に、輪島塗の赤、緑の山菜に稲穂の黄色、黒がわら、冬はどこまでも続く白。海の写真を見ただけで何月かわかる人も多くいるそう。明日の料理会は実際に輪島で使っていた赤膳を使ってやるそうで、ここにも能登の赤があるのだなと思った。その後は金石出身の方ならではの子どもの時の水泳の授業の話や、幼稚園の話しなどについて教えてもらった。夕方、親子がいらしたので話を聞く。2007年に嫁いできたということで、「千葉の集合住宅出身だから、最初は色々驚くこと多かった」そう「私が知らないことも周りはみんな知ってる」という言葉に地域性がよく表れているなと思った。子どもの習いごとは金沢に行っているらしい。その後、来てくださった方から色々話を聞いた。金石町家は築100年は経っているといい、昭和2年生まれのおばあちゃんが住んでいたと教えてくれた。家の主は船に乗って木材を能登に運んでいたとか、店先で茶碗屋をしていたとか。隣と競合しないのかなあと思っていたら、「こっちにないけど隣ならあるかも」とお客さんを案内することもあったらしい。7人の子どもがいたが、長男は戦死、次男が跡を継いだという。その次男の妻から「家を買ってくれんか」と相談があり、買い取って改修し、金石町家（仮）としてオープンしたのが去年。歴史が繋がった。金石のガイド、みやのこしこまの立ち上げについても伺う。2020年にクルーズターミナルができるのに合わせ、何かできないかと相談があり、女性を集めて2019年に立ち上げたそう。右も左もわからないところからの出発で、金沢のやっている「まいどさん」というガイドの方々に習いながら始めたという。沖書店の向かいに映画館（金石東映）があったとか、日和山の前にある美容院は45年くらい前までは料亭だったとか、バスターミナルには串けんという焼き鳥屋があったとか、金石街道の大きな店（いまのOMEGAやファミマ）は全部貯木所だったと教わって、今の金石と違う風景がどんどん見えてくる。ほかにも戦時中の話など初めて知ることばかりでとても勉強になった。やはり同じ時代のことで人によって覚えている内容が違っているので、何度聞いても聞きすぎることではない。本龍寺に疎開していた人がうん十年ぶりとなるコロナ禍に訪ねてきて、自分の名前のついた荷物かけを見て感激した話が興味深かった。ここ金石にもきちんと戦争の影はある。これは絶対に残したいと思った。少し書いて金石荘へ。女湯入り口でおばあさんと鉢合わせ驚いて飛び上がってしまった。「ごめんなさいね」と何度も言うので、「こちらこそ」と返す。すれ違いざまに「ゆっくりあったまってね」と言葉をかけてもらい、なんて素敵な挨拶なんだろうと思った。お湯処でいつか使ってみたい。さっと入浴して出ると、高齢と中年の二人が脱衣所で話している。「犬は慣れたか」という話で、内容からして避難している人ではないかと思った。「うちの犬はにおいが違うともうだめやから」と言っている。聞けば、飼っている犬が少しのにおいの変化でも眠れなくなってしまうらしく、新しいバスタオルに慣れさせるのに随分かかったということだ。よく「ペットと避難所」関連のニュースは見えていたが、人間でも変化に動揺しているのだから、理由がわからない動物のその不安はいかばかりかと思った。

0712

緊張で早朝に起きる。身支度をしてとにかく書く。間に合うかどうかはらはらしているにも関わらず、今日は色んな人が来た。まず9時頃にNHKの記者が来た。隣で開催する「能登のお母さんの料理会」の取材だろうと思う。続いてその料理会に参加する能登の方が来た。町家を開け、冷房を入れる。せっかくなので少し話した。いまは金沢市内の復興住宅に夫と避難しているそうで、「夫に車で送ってもらったから早く着いちゃって」と言っていた。このイベントをどこで知ったんですか、と聞くと「友達に教えてもらった」そう。その友達とも本当にたまたま会って、県庁の屋上で偶然同じ町内の人と会って、「みんなどこに避難したんか知らんから、半年たって、生活が落ち着いたら急にさみしーなっ
てね」「ここにきたら誰かに会えるかなと思って」という言葉に、切実なものを感じた。東北の時と同じく、避難先でコミュニティをどう存続させるかの問題が10年経っても起こっているのだと思った。「ああ、来たのね」と友人らしき女性が入ってきた。お礼を言って場を後にする。昨日紹介していただいたみやこまちのお二人に町家でお話を聞かせてもらおう。先にいらした一人がバスターミナルの近くに住まれているということでその話に花が咲いた。高校の時に金沢まで出るために電車に乗っていたらしい。書いている最中に色々不透明だった、小学校の最初の校舎の引っ越しの話を詳しく聞くことができた。涛々園について、戦後に貸し座敷とお風呂だけやっていた頃の写真をを見せてもらった。「ここに写ってる大人はみんな死んだるが」「そのうち私たちも同じことになるな」と言いながらあははと笑う二人がおもしろい。話しながら「あーなつかしいねえ」「こんな話の何が参考になるかね」と何度も言うので、こちらでも何度も「こういう話がおもしろいんです」「きっと残しておいてください」と繰り返した。最後に戦争の話から土地の発展の話になった。「もしかしたら今ここ金石に新幹線が走ったかもしれないのよ」と言う。聞けば、昔ここに鉄道をひく計画があったのだが、海上運輸が盛んだったこともあり断ったのだという。「あの時目先の利益に飛びついてしまったから、こうなってる。先見の明がある人がいたら、今頃ここでリニアが見られたのに」と嘆く姿を見て、あったかもしれない金石のまた別の姿を想像した。

夕方はWS。たくさんの人に参加してもらえ嬉しかった。最後、2本読んだ際にけやきの語りが様々な声で紡がれる様に感動した。時間管理をミスって少し早く終わってしまったけれど総じてよい感じで終わった。ほっとしていたら22時。急いで金石荘。入ると脱衣所で何人かが地図広げて何やら話している。「ここが金石中学校、それでこっちがああのスーパーやる、」と道を案内しているらしい。みんなで地図をのぞき込んでる姿ってなんでこんなに演劇っぽいんだろうと思う。入浴後の脱衣所も何やら数人が話している。話題はどこかの病院がいいか、親の介護についてなど。見たことのある病院の名前をいくつか出して「あそこはよかったよ」「こっちはわたしら貧乏人でも入れる」などとシビアなジャッジが下されていた。病院の順番待ちの話になり、「必要な時に入れるかわからんしなあ」と言う。話題は介護施設に親を入所させることに移り、「職員が人（入居者）を殴ったりしとるのとか、あんな見たら怖くてな」「怖いゆうてもほかにないんやから、仕方ないかて。じゃあ自分で看れるんか?」「無理や」「じゃあ順番待つしかないわ」「そんなこと言うてもまだ親ボケとらんもん」など、漫才さながらの掛け合いだった。帰って今日聞いた話を用いて2本追加エピソードを書いた。

0713

起きて最終校正し、コンビニで印刷。椅子を並べて客席の配置を考える。10時から小野寺さん読み合わせ。明るい声がありがたかった。一人稽古だと怒涛の7本朗読になってしまうが、最後まで元気よくこなしてくれた。のぶさんと宮向さんも足を運んで下さりありがたい。稽古終わりに小野寺さんとのぶさんを周辺に案内しながら金石の歴史を少し話す。エピソードに出てくる日和山や海、パスターミナルをめぐった。私自身も一週間前までは知らなかった場所の歴史を二人に話しているのが不思議な感じがした。昼食を食べにそらみそへ。大繁盛で30分くらい料理を待っていた。子ども連れが多く、元気だなあと思った。壁にあった絵をよくよく見ると金沢駅まで入っているのだが、金石に比べて大野が随分小さく描かれていて（そういうデフォルメ表現）、昔からの因縁をここで再び感じた。うみの合唱団の練習見学に行こうと向かったが、階段下で男の子が大の字になって抗議をしており、「これを無理やり突破するのみなあ…」と思い断念した。町家に帰ってテキスト校正。16時から木林さんの読み合わせ。一人で読んでいることもあり少し走っていたのでゆっくり読んでほしいと願う。やはり二人の声で読んでもらおうと、頭だけで考えていた演出はすぐに書き換えられていく。声主導で、各章の動きを新たに考える。稽古終わり、同じように木林さんとも周辺を歩いた。道端にカニが歩いていて「あ、電柱の後ろにカニがいる」と木林さん。道路でたまたまに車にひかれたカニを目にしたのがこういうわけだったのかと驚く。夜は、大学時代の友人と金石荘で待ち合わせ。大学の時に同じ授業を取っていたこの友人とはたまたま手紙のやり取りをする仲だったのだが、滞在が決まった頃に相手の住所を書いて「大野…大野…!？」となったのだ。彼女は教師をやっている。学校は兼六園の近くだが、生徒に会いたくないため少し離れた大野に住まいを決めたのだという。金石荘の風呂に、初めてゆっくり入った。自分たちがゆっくり入る側になると、ほかの方がいかにさっと入浴を終わらせて出ていくかわかる。しかし、考えてみればそれが当たり前の気がした。温泉と言っても贅沢品というより日々の生活に根差したお風呂なのだ。休日でも部活動があるそうで、大変だなあなどと話していたらあという間に閉店間近だった。急いで出ると番台の方がおり「最後かね?」と聞くので、「まだ一人いました」と答える。遅くなったことを謝ると、「まだ時間あるから大丈夫よ〜」と言ってくれた。駐車場に出ると、友人が病院を指して「あそこ入院してたんだよ」と言った。手紙で聞いていた入院先が、金石にあったのだ。知らない世界がつながっていくような感覚になる。夜の港を京都で一緒だった大学の同級生と見ているのが不思議で、しばらく名残惜しく立ち話をした。

0714

一日稽古。役者の二人に普段の演出の傾向を聞くと、結構がつつり付けてもらっている感じだったので、こちらもそうしようと思う。脚本を手にして演じるので、二人に負担のない程度でどのくらいお願いしようかと思っていたのだが、二人からもどんどん提案をもらってありがたかった。さくさくと3幕までいき、4幕で少しハイテンションになった。休憩をはさんで、5、6幕まで。予定時間を超過してしまい、おのでらさんの予定があるため終わり。結局通しができなかったけれど、大丈夫なんじゃないかという気持ちになる。仕事の関係で明日帰らなくてはならなくなり、切符の変更のためのぶさんに金沢駅まで送って行ってもらおう。三連休真ただ中の金沢駅、駅員さんの対応が「無」という様子で笑ってしまった。愛想がないなんてもんじゃなかった。コンビニで販売用脚本印刷。

0715

本番日。本番近いとアドレナリンが出まくってしまい2時間おきに目が覚める現象に誰か名前を付けてほしい。自分が演じるわけでもないのに…。8時に宮向さん来て、照明仕込み。机の上に脚立を立てることで「オープンから一度も触ったことない」という位置に照明を吊っていて、その機材が手作りながら絶妙に場に溶け込む光でとてもよかった。朝から一度通し。二人が自信を持ってできたらいいなあと思う。宝栄さんが幕間の動きに身体に集中する要素を入れてくださった。12時からゲネ。その動きがしっくり来ないようで終了後に調整する。14時から本番。ありがたいことに席がいっぱいになった。のぶさんの演奏が光っていた。それに力もらうように二人の演技も安定していた。終了後、アンケートを沢山書いてただけで嬉しかった。読んでいる中でじわじわ感じたこと、矢張り金石の人に見てほしかったなあというのが大きく、特に話を伺った方がほとんど来られない、というのは弾丸スケジュールで仕方ないとはいえ、何かひとつ答え合わせをしそびれたような気持ちになった。一方で他地域から来た人に「金石の歴史が知れたよかった」「学校で子どもたちに見てほしい」という感想をいただくこともあり、「これで終わるなよ（もう一回金石の人に見せるために公演しろよ）」と誰かに言われているような心持に。報告会はほとんど脳が働いていなかったが、赤丸急上昇のお二人の明るさに助けられた。「そこにいる人以外のためにも踊っている」という感覚、とてもよくわかるなあと思った。「かないわのこえ」も、これから先のまだ生まれていない子どもや、もういなくなってしまうかつて金石に生きていた人に届けばいいなあ考える。一週間にしてはできることは全部やったとはいえ、やはり他地域のレジデンスと比べるとまだまだやり残したことが多い。ひとまず次はみやこまちのガイドと、大野湊神社のお祭りに来ようと静かに誓った。



[金石町家(仮)サポーター（門阪 翔大）感想]

私道さんははじめて金石に来たときから“知らないまち”に慣れている人のように見えた。一方でその彼女の落ち着いた雰囲気は、ものごとを経験に照らして理解をする以前の、ただ見聞きするものを浴びている少年少女のような自然体にも見えた。ここ金石でしか見られないものも、おそらく他のまちにもよくあるものも、等しく価値を見切らず、まずは浴びるように向き合う人だと思った。

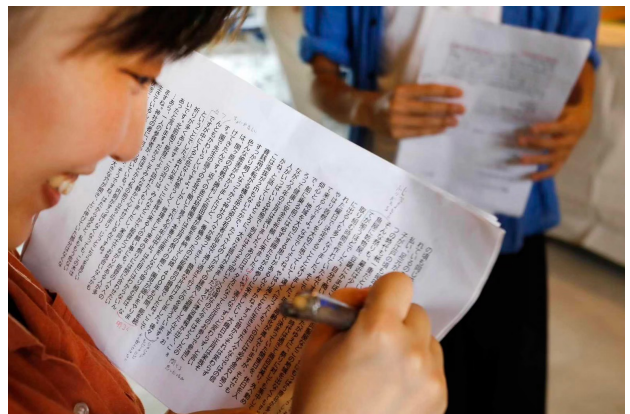
ゆえに彼女が何に興味を持ち、何を見て何を想像しているのか、傍目には測りづらいところがあった。ただよくわかったのは、彼女はよく走るということだった。彼女の制作のためには短い滞在期間だったのだろう。おそらく寝ている時間以外はすべて使い切ったように見えた。

彼女ははじめに、わたしが事前に用意した町人リストのなかから数人選び出し、その人たちから紹介してもらった人にまた話を聞きに...と、2,3日のうちに数珠つなぎに10人ほどに取材した。取材と言っても決まったテーマや質問があるわけではなく、前置きもほどほどにその場のノリに合わせた会話をしようとしていたように見えた。ゆえに延々と話が続くことが多く、1人につき1時間より短くなったことはほとんどなかった。

この取材に同席していて印象的だったことは、このまちに長く関わっているわたしが想像もしなかった話が相当多く出てきたことだった。彼女はテーマを絞って取材することをしないので、自然に金石についての見聞にかぎらず、話者自身の生まれた頃から今までのストーリーが話されることが多かった。その人しか見ていない、他の誰も知らない景色が語られ、またその人の親や祖父母から伝え聞いた景色が語られた。これがどれも同じまちにあった景色か、と、聞くごとにこのまちの理解が遠のいていくような体験があった。それぞれの語りにあったのは事件ではなく生々しい息づかいであり、大きな歴史ではなく小さな歴史であり、今ここで聞かないとふと消えてなくなってしまうのではと思わせるをえない話ばかりだった。

彼女がこの短い期間に7編も物語を編んだことをはじめて知ったときは、なんと過酷なことをと思ったが、同時に頷きもした。この8日間に彼女があらわした物語はこの8日間がなくては二度と世に現れなかった話も多かっただろう。彼女の金石でのアーティストインレジデンスは、特別な産業や歴史的な用語があらわれないささやかな思い出も語るに値すると、まちの人々に勇気を与えたように思う。しかし最終公演を見るに及んでわたしが感じたことは、彼女があらわしたものは、今回見聞きしたそれぞれの話についてだけでなく、もう知ることはできないかつての誰かの景色について想いを馳せる時間だったのではないか、ということだった。彼女の制作や作品が、まちの魅力探しやオルタナティブ町史の発掘、またそれらの芸術化、のように印象づかないのはそのためだと思う。彼女の会話や執筆や舞台は、この世界にあったかもしれない想像することもできない景色を想像する時間を与えてくれる。わたしたちの視線は、誰にも知られてこなかった金石だけでなく、もう知ることはできない金石にも広がっていく。

はじめてに慣れた大人と、判断することを知らず浴びるだけの子どもを併せ持った彼女の印象は、きっと“自分が何者であるか”より先に“世界はどういったものか”に関心を持たざるをえない性分に見たのかもしれないと今では思う。「かならずまた来ます」と言って去った彼女の言葉を信じるわたしの身は、往く人来る人を見ているだけのまちというものとまるで同化したかのようで、そう思うと、彼女もまた“いつかの金石の景色のひとつ”になったことがよくわかる。ずっと前からここにいたかのようにまちの人と馴染んで過ごしていた私道さんのことを、いつか思い出して話す人がいるかもしれないし、いないかもしれないが、彼女のあらわした物語はこういう時間についてであったように思う。



[総評] 黒澤 伸（金沢芸術創造財団／アーツカウンシル金沢・統括ディレクター）

2024年度より、金沢芸術創造財団ではアーツカウンシル（中間支援）事業の助成プログラムの一つとして、新たに『交流滞在支援』をスタートさせている。県外のアーティスト等が一定期間地域に“滞在して活動する”場合にその交通費や宿泊滞在費用の一部を助成するというものだ。公演や展覧会など、単純にイベントの開催を求めるものではなく、この支援プログラムが期待しているのは、そこへ至るプロセス、その中で人と人が出逢い、交流が生まれ、その経験の蓄積がまた次の展開につながること。人と人の“かかわりしろ”を重視したリサーチや発表を支援すると同時に、地域の中に活動のサポートができる世話役が生まれてくることにも期待して、招聘活動を行うコーディネーターからの申請を受け付けている。そして今回の「北陸²Regionダンスフェスティバル2024」は、モデル事業といって良いほどこの期待にピッタリと一致する内容のものだった。

主催者の招聘に応募、審査で選ばれたのは私道かびさんと赤丸急上昇さん。劇作・演出家、と、コンテンポラリーダンスユニットというようにジャンルは異なるが、それぞれが地域やそこにいる人々・環境と関わりながら、場の出来事をかなりビビッド（生のまま）に物語にする、あるいは反応するかのごとく振る舞いや動きに仕立ててゆく。そこに見えてくるものは、先ほどの“かかわりそのもの”だ。そしてその関わりの中に、場の誰もが溶け合うように入り込んでくる。今回、金石と能美の2箇所に、そのような空間が立ち上がった。

もともと表現にはこのような、環境を映し出す・皆が溶け合うという性格はあるにしても、あらためてそのことをまざまざと見た気がする。それぞれの場のコーディネーションも大変うまく機能していたように思われ、何より、関わった皆さんが楽しそうだったし、そこに“いる”自分自身もそうだった。

私道かびさんが現地入りした初日、私道さんによる取材・インタビューの様子を見学させていただいた。金石・妙覚寺のご住職から聞く「金石レシピ」の話の中に、醤油のみの出汁というか100%醤油を煮汁にして魚を煮付けるというものがあった。煮汁が濃いので、煮立ったところに魚を入れてもう一度煮立ったら引き上げる超時短調理。実際に料理そのものの拝見したのだが、表面は醤油で色づき、中はホクホクの白身という感じで、自分ではこのレシピを“煮魚界の焼きおにぎり”と覚えることにした。こうした一つ一つの話が紡がれ、作品として編まれてゆくその中には、同じ話を聞いていた自分もそのどこかにいる・・・金石の物語は、金石ではない場所の、人の、物語にもなる。一方で、赤丸急上昇さんが能美市の小学校で行なったワーショップを見学して驚きだったのは、子どもたちのあまりにストレートでムチャクチャ全力感ある反応だった。それぞれの学校特有の雰囲気や特性もあるのだろうが、これは都会では見られないものだと感じた。そうした環境が人の行動や場作りに与える影響の大きさは言うまでもない・・・同時にアーティストの作法に対しても。

赤丸急上昇のお二人もそうした全てを飲み込みながら、かくして四国からやってきた二人に能美の身体が生じる。そしてその身体は、今回、誓立寺という寺の本堂で真っ白い鹿に化けたのだった。『鹿の子』と呼ばれる郷里の伝統を知る二人が、その祖先であるらしい岩手の『鹿踊り』に出会ったことをきっかけに、これまでどこにもいなかった二頭の鹿として生まれてきたものだ。いや、鹿なのだろうか？ 彼らの舞に、何か、見てはいけないものを覗き見してしまっているような感覚を覚える・・・人間ではない何者かが、そのものたちの作法で何かにへ向けて舞っている・・・だからそれは観客に見せる所謂ダンスなどではなく、草花や虫たち、動物たちへ、あるいは大地や空や風や宇宙へと・・・そのように、彼らのいる世界に向けられたものなのだろう。自分の知っていたはずの世界に、これまで気づいていなかった別な世界が覆い被さってきた。私に何が起こったのだろう。いずれにせよそれは衝撃的だった。

・・・かかわりの経験、とは、かくも輪郭が捉え難く、一人一人に異なるもので、かつ結果が予め約束されてはいないオープンエンドなものだ。今回、プログラムの一部に関わった私に生じた上記の経験自体はその中の一つで、他の方々を含めた、つまり関わりの経験の全体はさらに複雑な輪郭を持っているだろうし、アメーバのように周囲と溶け合いながら今後も生き続けるに違いない。『交流滞在支援』助成プログラムの採択にあたってその基準を訊かれることがある。滞在日数や対象者の属性などの説明もするが、より解り安く言うならば「招聘者がどのくらい新しくお友達を作って帰ることが出来るか」が評価のバロメーター・・・と回答している。関係の密度は色々あれども、こうした地道なネットワークの積み重ねりが、将来、地域をより豊かなものにする、と、シンプルに確信している。

[総評] 乗越 たかお（舞台評論家・作家／北陸Regionダンスフェスティバル公認アドバイザー）

Aチームについては、いろいろな出会いがあり素晴らしいと思います。AIRは、地元の人と出会って何かを作っていくことが重要です。しかしそれだけではなく、それまで地域のみさんの生活の中に無かったものを滞在するアーティストが持ち込み、新しい価値観と出会うことが、このフェスティバルの意義だと思います。それはもちろん、その土地の歴史や文化や人々に触れるアーティストにとっても大きな財産となるでしょう。

なにより、子ども達がアーティストと出会うことで「こんな変な大人がいるんだ、いてもいいんだ」という世界の多様性を実感できることがきわめて重要です。以前、保育園の教育にコンテンポラリーダンスを取り入れている園長先生に話を聞いたことがあるのですが、「子どもの発想は本来ものすごく多様で制限のない可能性に満ちたもの。しかし大人はそれをある方向に矯正してしまいがちである。しかしコンテンポラリーのアーティストは子どもの無軌道な発想をそのまま受け止めることができる。だからアーティストに来てもらっているのです」と語っていました。

アートにはそういう力があります。まして一定期間地域に滞在して暮らし、住民と同じ空気を吸って生活を共にしたアーティストの作品は、同じパフォーマンスでも観客への「入ってき方」が違う。地ものを食べて地のお風呂に入り、地の子どもに出会い、地の大人に出会い、パフォーマンスを共有する。本当に良いと思いました。

Bチームについて、私道さんの脚本はその土地を知ってもらうためのツールとして観光やその他役に立ちそうで、良い成果物ができたと思います。「アーティストがその土地の人々のことを知るうとする」というAIRの第一の目的を超えて、「アーティストの成果物が、さらに多くの人が土地の歴史や文化を知るきっかけになる」なら、これは素晴らしいことです。土地の人も、話すことによって自分の認識が言語化され整理され、地元の魅力を再認識することにもなります。それはアーティストという「異物」が入ることで新しい視点が持ち込まれコミュニティが活性化し再発展していく契機となる。AIRのいいところです。

このAIR型フェスティバルには希望を感じています。やはりどの分野でも「文化は交わる時が面白い」からです。長く継承され切磋琢磨してきた文化が、別の文化とクロスする時に、かつてない輝きを放つ。あらゆる分野のアートはそうやって進化してきました。

もっとも最近の若い人は、ネット動画を見て「これやばいよね」と言っているだけで、何かをやっている様な気になったりする。ダンスなのに身体性が希薄になっている面が現代にはあります。その中で大事なのは英語の“Move”という言葉です。この単語には「身体を動かす」という意味もありますが、「引っ越す＝身体ごと動かす」という意味もある。その意味で北陸Regionダンスフェスティバルは、北陸に引っ越して（Move）、身体を動かして（Move）作品を作る、という両方を内包したフェスと言えるでしょう。

北陸は100年に一度の大地震に見舞われたつらい時期ですが、この状況に遭遇したアーティストが何をするのかが問われます。クリエイション環境の確保や態度はもちろんですが、災害をアートで消費してしまうことなく、人と人が出会い、この状況に取り組むことは、アートの根幹を問うことになるでしょう。北陸Regionダンスフェスティバルは、それだけの深い重要性を担った、希有なフェスなのだと思います。

私は今後ともアドバイザーとして協力していきたいですし、期待しています。また様々に発展する可能性を感じています。今回はとても手探りな状態だったとは思いますが、みなさんのクリエイションの力で突破して貰えて感謝しています。



[事業を終えて] 宝栄美希（北陸Regionダンスフェスティバル芸術監督／企画代表）

私道かびさんの日記にもあったように「演劇(ダンス)を見たいとも思っていない」人が地域では大半だと思います。私たちのやっていることを「人々は(生活の中で)必要としていない」ということは長年向き合ってきた変えられない事実です。その事実は新型コロナウィルスの流行によってより顕著に表れ、私たちに突きつけられました。生きるためには無くても構わないものなので、自分とは関係ない・関わる必要がないと思っている、それが地方の田舎では当たり前のようだと思います。そのような場所で私たちは何をすべきか・何ができるかを考え続けてきた結果、このAIR型フェスティバルの企画に至りました。

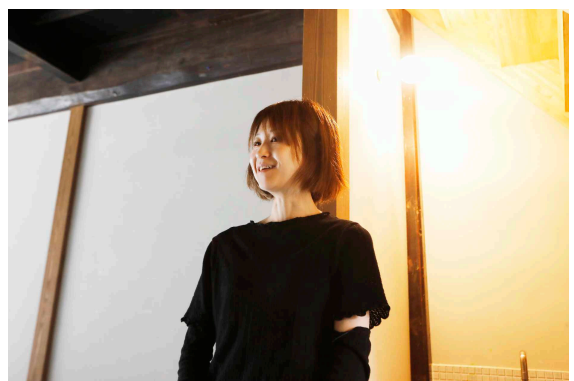
このAIRフェスティバルの前身である北陸ダンスフェスティバルでは、コンテンポラリーダンスの面白さを人々に伝えるため、人々に劇場に足を運んでもらうことを前提にして来ましたが、そのやり方では地域に住む”自分とは関係ない・関わる必要がない”と思っている人々には伝わる可能性どころか、目に触れることさえないのだと、前フェスティバル事業を通して実感しました。そして今回、事業の内容を一新し、アーティストに地域に滞在しながら活動してもらうことで、人々を劇場に呼ぶのではなくこちらから地域に出向いて行き、舞台を観るよりも近い距離で人々とアーティストが関わる機会を作りました。

今回招聘したアーティストの2組には、現地で何をするか、どの様に地域の人々と関わるかをこちらから提示せず、それぞれに考えてもらい、現地サポーターと相談しながら事前準備を進めていきました。また、こちらの用意する滞在期間が1週間と、一般的なAIRプログラムに比べて短いこともあり、成果発表においてはその時点で未完成なものや実験的なものでも構わないこととし、その地域でのAIRによって”何かの始まりが生まれるきっかけ”を作ってもらうことを目的としました。その様にアーティストに自発的に活動を行ってもらう中で、赤丸急上昇のお二人には「生きている」ことをAIRする中で感じる事ができたと言っていました。私道かびさんは「その上でこういう人間が何をしたらちょっとは役に立つだろうか。」と考えて活動してくれました。

アーティストも表現活動をしないう人も生きていることは同じであり、人と人との相互関係なくしては社会は成り立ちません。現時点では交わる可能性のなかった人々が、お互いの間にある壁を壊して関わり合うことは、双方の発展と、全ての人が生きやすい社会を築くことにつながります。元々関係のなかった人々をつなげることがこの事業の役割であり、新しい挑戦です。

北陸Regionダンスフェスティバル2024を終えて、沢山の収穫を得られ、また課題にもぶつかりました。両チームとも、アウトリーチでは地域の人々とアーティスト本人の相互に得られるものが多く、AIR型フェスティバルを行った成果がありました。関わった人々の心が動く場面をいくつも目撃し、また地域で創作活動を行う意義も証明されました。課題となったのは、アウトリーチが成果発表公演の集客に結びつかないことでした。劇場ではない場所(お寺やコミュニティスペース)で行った成果発表公演には、アウトリーチでアーティストと関わった人々はほとんど足を運びませんでした。そこにはアーティストの力量等に関わらない別の壁がある様に思えました。また、フェスティバルを終えた後も、アーティストの皆さんが残してくれたものを活用し、地域の発展につなげることが私たちの継続的な課題でもあり、義務でもあります。

今後取り組んでいくべきこれらの課題において、どちらか一方を変えるために働きかけるのではなく、双方が変わっていく方法を考えることが必要だろうと考えています。またそのあり方や考え方を変えて行かねばならないと、今回の事業実施を終えて思いました。



[北陸Regionダンスフェスティバル2024 機構]

主催：北陸つなげて広げるプロジェクト

芸術監督/企画制作：宝栄美希

助成：(公財) 澁谷工業学術スポーツ文化振興財団、アーツカウンシル金沢

協賛：加賀建設株式会社、アトリエGIMOTO

協力：金石町家(仮)、能美市立和気小学校、誓立寺、黒澤伸(金沢芸術創造財団)、北村修司(能美市議会議員)、
葭田護(ヨシタデザインプランニング)

STAFF

照明：宮向 隆

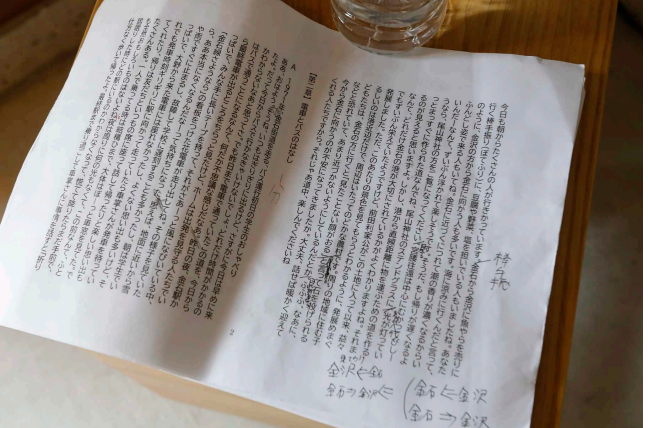
音響サポート：山田のぶ、上野賢治

映像撮影：奥 祐司

写真撮影：フォトグラファーNOD 野田 啓

制作：宝栄 美希

運営：青木 正子、北山久美子



石川県に滞在中のアーティストと交流してみませんか？

参加募集プログラムへのお申込みはWebサイト上の申込フォームをご利用いただくか
もしくは下記連絡先へご連絡ください！

参加者募集プログラム

スペシャルワークショップ

奏でる「カラダ」

身体は楽器のようにあらゆる音を奏で、思うまま自由に楽しめる可能性の宝庫です。丁寧に身体や意識を追求して、時に自分でも知らなかった自分をあなた自身の「カラダ」が教えてくれる「身体で思考する」幸せな時間。

また、他者との関わりの中から新しい自分の感覚も見つけていきます。時に無邪気に子どものように、自由に「カラダ」で探しましょう。その発見は難しいものではなく、むしろワクワク楽しい時間。

赤丸急上昇のワークショップを通して、奏でる「カラダ」に出会ってください。ダンスや運動の経験、年齢など全て不問です。

まだ出会ったことのないダンスの種を一緒に探しましょう。

日時：7月10日（水）19:00～20:30

対象：誰でも

料金：2,000円 学生1,000円

定員：20名程度

場所：能美市内



成果発表公演

日時：7月13日（土）17:00～/19:00～

14日（土）16:00～/18:00～

対象：誰でも

料金：一般2,000円

大学生高校生：1,000円

子ども/70歳以上の方：500円

定員：各回30名程度

場所：誓立寺（能美市辰口町51）

音響サポート：上野賢治



誓立寺

スペシャルワークショップ

「演じるってなんだ？金石のひとたちの声で話してみよう」

俳優が行っている「演技」。演じることは、難しいようで誰もが簡単に行えるワザです。今回は簡単なゲームをしながら「演じる」を解体したあと、金石のひとたちの声を編集したテキストを使って、演技をしてみます。「違う人になる＝演技をする」経験をしながら、このまちのことを知ることができるWSです。

日時：7月12日（金）19:00～20:30

対象：金石の歴史に興味がある方、演技に興味がある方、声を出すことが好きな方（参加ではなく見学もOK）

料金：一般1,500円 学生1,000円

定員：10名程度

場所：金石町家（仮）



成果発表公演

日時：2024年7月15日（月/祝）14:00～

料金：一般1,500円 学生1,000円

定員：30名程度

場所：金石町家（仮）

音響サポート：山田のぶ



金沢町家（仮）

北陸Regionダンスフェスティバル2024「報告会」

公認アドバイザー/乗越たかお氏をゲストに招き（オンライン参加）、
招聘アーティストらのAIR実施報告会を行います。
AIR実施地域やダンスに関わりのない方のご参加大歓迎です。

日程：7月15日（月/祝）16:00～

会場：金石町家（仮）

定員：オフライン/40名、オンライン/100名

料金：無料 ※要予約

対象：だれでも



撮影：
フォトグラファー NOD 野田啓

ゲスト

乗越たかお

北陸Regionダンスフェスティバル公認アドバイザー

作家・ヤサぐれ舞踊評論家。株式会社ジャパン・ダンス・ブラグ代表。国内外の財団やダンスフェスで審査員やアドバイザーを務める。『コンテンポラリー・ダンス徹底ガイドHYPER』『ダンス・バイブル』他著書多数。最新刊『実例解説！コンテンポラリーダンス入門』電子書籍にて好評発売中！

お問い合わせ：

北陸つなげて広げるプロジェクト（代表：宝栄美希） メール：hoeimiki25@gmail.com 電話：080-2052-2026

公式サイト：https://sites.google.com/view/hokuriku-region-df/

詳細はWebサイトにて公開中

